

AI 生成時代における人間の創作活動の未来

—イラストを中心に—

永井捺愛

本研究は、生成 AI が急速に普及する現代社会において、人間の創作活動、特にイラスト制作分野がどのような影響を受け、今後どのように共存していくことが可能であるのかを明らかにすることを目的とした。近年、画像生成 AI の発展により、短時間で高品質なイラストを生成することが可能となり、創作の敷居は大きく下がった一方で、著作権問題や創作の価値、評価基準の不透明さといった課題が顕在化している。

本研究では、生成 AI 技術の生い立ちや画像を生成する仕組みなどの説明を行った上で、海外事例として、Colorado State Fair という美術コンテストでの問題、日本事例として、「忍たま乱太郎×100 時間カレー」の問題を取り上げ、社会的反応や制度的課題を分析した。さらに、先行研究の検討を通じて、生成 AI を人間の創造性を拡張する補助的存在として捉える視点を整理した。加えて、大学生を対象にアンケート調査を実施し、若年層の生成 AI に対する認識と利用実態を分析した。その結果、生成 AI は広く認知されているものの、日常的に使用されている技術ではなく、「必要に応じて使う補助的ツール」として慎重に受容されていることが明らかになった。

以上の分析から、生成 AI と人間の創作活動は対立関係ではなく、人間が最終判断を担うことで、AI を創作支援ツールとして活用する共創関係を築くことが重要であると結論づけた。そのためには、制度整備と教育を通じた AI リテラシーの向上が不可欠である。